● ビブリオテーカ ●

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No.18
2022.11

ある大学図書館の落書き

国際総合政策学科
教授 大淵三洋

まず最初に，以下の文章は，平易かつ簡明に書く事を旨としました。私は「～である」調ではなく，あえて「～です・ます」調を使用します。

さて，本文を始めることにしましょう。ある大学（皇后陛下の母校）の図書館[1]には，次のような20項目の落書きがなされている，との流言蜚語が世界中に流れました。その発端は，2007年，朝4時に中国のネット掲示板で，学生がお互いを励まし合うために，書き込んだものとされています。それが，SNSなどで話題となり，拡散されたのでしょう。後日，大学当局が，正式に否定しています。しかし，この落書きの内容は，素晴らしい真理を含んだ条項が多い，と思われます。そこで，流言蜚語であることを承知の上で，私は読者に紹介することにします。

1. 今，居眠りすれば，あなたは夢をみる。今，学習すれば，あなたは夢が叶う。
2. あなたが無駄にした今日は，どれだけの人が願っても，叶わなかった明日である。
3. 物事にとりかかるべき一番早い時は，あなたが「遅かった」と感じた瞬間である。
4. 今日やるほうが，明日やるよりも何倍も良い。
5. 勉強の苦しみは，一瞬のものだが，勉強しなかった苦しみは，一生続くだろう。

▲ ある大学図書館前にて

6. 勉強するのに足りないのは，時間ではなく努力である。
7. 幸福には順序はないが，成功には順位がある。
8. 学習は，人生のすべてではないが，人生の一部として続くものである。
9. 苦しみが，避けられないのであれば，むしろそれを楽しめ。
10. 人より早く起き，人より努力して，初めて成功の味を真に噛みしめることができる。
11 怠惰な人が，成功することは決してないが，真に成功を収める者は，徹底した自己管理と忍耐力を備えた者である。
12. 時間は，一瞬で過ぎていく。
13. 今の涎（よだれ）は，将来の涙となる。
14. 犬のように学び，紳士のように遊べ。
15. 今日歩くのを止めれば，明日からは走るしかない。
16. 一番現実的な人は，自分の将来に投資する。
17. 教育の優劣が，収入の優劣である。
18. 過ぎ去った今日は，二度と帰ってこない。
19. 今，この瞬間も，相手は読書して力を身につけている。
20. 苦しんでこそ，初めて進める。

さあ，どうでしょう。読者は，どの項目に興味をもたれたでしょうか。「難しいなぁ」と感じられた方も多いでしょう。このすべての項目とも，重要と思われますが，落書きを読み解く鍵となる言葉は，「今（今日）」と「努力」という2語に過ぎません。この2つの言葉を中心に，自分の見解を付加してみます。

まず，今（今日）という言葉に注目してみましょう。今（今日）という言葉は，(1)，(2)，(4)，(13)，(15)，(18)，(19) の項目で使用されています。さらに，言葉としては使用されていませんが，(12) を含めてもよいでしょう。ラテン語で書かれた詩人ホラティウス（Horatus）の詩には，カルペ・ディエム（Carpe diem）という言葉が散見されます。では，カルペ・ディエムなる言葉は，どういう意味でしょうか。直訳すると「その日を摘め」となります。しかし，私は「今を生きろ」「薔薇（ばら）の花が散らぬうちに」と解釈しています。はっきりいって，「時不待人」[2] です。私は，読者に今という時間を活用してほしい，と考えています。中国の古典に『論語』があることは，賢明な皆さんなら，よくご存じでしょう。その子罕第九に「後生可畏也」[3] とあります。自分は，立場上，「先生」と呼ばれることがあります。読者の多くは「後生」（後に生まれた者）でしょう。後生の強みは，時間という武器を有していることです。私などは，ただ馬齢を重ねただけと思います。

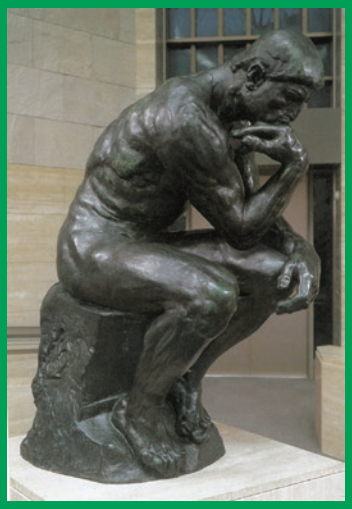
閑話休題[4]

次に，努力という言葉に注目したいと思います。努力という言葉は，(6) と (10) の項目でしか明示されていませんが，(1)，(5)，(11)，(13)，(15)，(17)，(20) も，その言葉の意味を内包していると考えられます。努力に関しては，発明王エジソン（T.A.Edison）の言葉が，多くの人によって引用されます。しかし，私は別の観点から説明することにします。それは，「過程」と「結果」との関係です。私にはとても理解できないことですが，「結果至上主義者」の人たちが存在します。「過程なんかどうでもよい，結果こそすべてだ」とする暴論を口にする人です。例をあげてみましょう。ある大学を希望して一所懸命に勉強したのに，その大学の入学試験に落ちた人がいるとします。それでは，それまで行った過程（努力）は，無に帰すのでしょうか。そんな考え方に同意することはできません。確かに，その大学に入学できなかったという結果は，事実であるといえます。しかし，その過程（受験勉強）は，決して無駄なことではない，と信じています。最低限度いえることは，努力しての結果と努力しないで得られた結果とは，同じ価値ではないということです。結果至上主義者を論破することは，極めて簡単です。人間が生まれてきた結果は，誰でも知っていると思います。言葉にするのも嫌なことです。そんなに，結果を重視することが，重要でしょうか。人間が生きる過程こそ，非常に重要だと僕は考えています。その過程のことを「人生」とよびます。

さて，結論に移ることにしましょう。ある大学図書館の壁に書かれた落書きの流言蜚語をめぐり，「今（今日）」と「努力」という言葉を，読者に真剣に考えて貰いたいと思います。考えるということ，思考にふけるということは，とても重要なことです。そして，考える場として，図書館を利用してください。大学図書館を検索の場と勘違いしている人が多いのは，とても残念でなりません。図書館の機能は，決して，検索だけではありません。そんなことは，自宅のパソコンやスマホのネットで充分です。大学図書館は，「大学の知的心臓部」だと断言します。真摯に学習し，物事を深く考える場です。私は，皆さんが「考える人」[5] になることを，強く望みます。

補注

1) ある大学の図書館は，全米で２位の蔵書数を誇り，24時間開館されています。我が日本大学国際関係学部の図書館も，41万冊という膨大な蔵書数を有します。
2) 「時は人を待たず」と読み下します。時間の経過は，非情です。今（今日）を待ってくれることは，決してありません。
3) 読み下しは，「後生畏るべし」です。原典には「後生可畏也。焉知來者之不如今」とあります。要するに，後から生まれた者には，畏敬の念をもって接するべきである。なぜならば，後から生まれた者には，時間がある。その時間を巧く使用するならば，先に生まれた自分と同じ歳になった時，遙かに自分を超越している，という先生（先に生まれた者）の嘆きです。
4) 講談の「閑話休題，言帰正伝」からきています。読者が長い文章を読むと疲れるので，ここで一休みし，話題を変えようとしています。映画等の中休み（Intermission）のことです。
5) 読者は，ロダン（A.Rodin）の「考える人」の像をご存じでしょう。この像は，世界に12体しか存在しません。フランス政府が，鋳造に制限を設けているからです。奇跡的なことですが，静岡県立美術館は，その「考える人」の像を保有しています。日本に現存するのは，２体しかありません。残る1体は，国立西洋美術館にあります。



▲ オーギュスト・ロダン「考える人」
静岡県立美術館所蔵

ESSAY

本で旅する

国際教養学科 教授　生内 裕子

母が小学校の教員だった。幼少期，母と一緒に訪れた小学校の図書室には，色とりどりの本があふれていた。『エルマーの冒険』『だれも知らない小さな国』は今でも愛読書である。今回はこの場を借りて，私と本（図書館）との関係を3つの時代で振り返ってみたいと思う。

最初に図書館に通うようになったのは，高校入学時にもらった生徒手帳がきっかけである。当時の手帳には，「高校生で読んでおくべき100冊」という名作のリストが載っており，高校1年生の私は単純に「在学中にこれを読破しよう！」と決意した。司書の先生が同級生のお姉さんだったいうこともあり，図書館は頻繁に訪れる場所になっていった。図書館の棚を眺めてリスト以外の本にも興味を持ち，さまざまなジャンルの本に触れることもできた。リストには無かった海外のミステリーを読むようになったのも，図書館に通ったおかげである。

次は，ニューヨークでの大学院生時代である。課題の本を読んだりレポートを書いたりするために，朝から晩まで図書館の勉強スペースを占拠していた。朝早く行かないとお気に入りの机が確保できないため，授業が無くても朝の9時には図書館のゲートを通っていた。在籍していた教育学部の院生には現役の教師が多かったので，夕方から開講される授業がほとんどだった。そのため，朝から夕方までを図書館で過ごすのが当たり前の生活となった。アメリカ人の友人には“bookworm”という名誉ある（？）あだ名をつけられ，「彼女に会いたければ図書館の2階へ」と案内されるようになっていた（後に知ったのであるが，彼女は私のお気に入りの机の場所まで把握していたらしい）。留学時代は，図書館が第二の自分の部屋のようだった。

そして現在。私の読書は新幹線で支えられている。新幹線通勤を始めてから，快適に読書のできる時間を確保できているのはありがたい。薄い本であれば一日の往復で読破可能である。またここ数年は，大学図書館の本屋大賞シリーズにも助けられている。『流浪の月』『52ヘルツのクジラたち』『同志少女よ、敵を撃て』など，多様性や意外性にあふれた本を手に取り，その世界を旅する。新幹線の座席が孤島になり，寂れた公園になり，異国の街になる。

図書館には不思議な力がある。心に棲みついてしまう本にも出会える。「創る者も読む者も，人は人生のそのときどき，大小様々な物語に付き添われ，支えられしながら一生をまっとうする（梨木，p.271）。」　読んだ本の記録を眺め，その時の自分を，感情を思い出す。素敵な本の旅をこれからも続けていきたい。

引用文　『ここに物語が』梨木香歩　2021年　新潮社

ESSAY

図書館と私

食物栄養学科 助教　難波 亜紀

図書館とは小学生のころからの付き合いである。

小学生の夏休み，私は地元の図書館によく通っていた。涼しさと静かさがちょうどよく，何時間でも時間を潰せたものだ。当時夢中になっていた本はドリトル先生シリーズで，今の本のようにかわいい絵が随所にちりばめられているわけではなかった。あっても小さな外国風の挿絵で，そこから物語を想像したものである。読書に飽きたら，日本の歴史のマンガを読んでいたが，日本の歴史に出ていた場所を実際に訪れたときは，マンガの世界と現実の世界がつながり，感動に浸っていた。

中学生になると行動範囲が広がりしばらく足が遠のいてしまったが，大学生になり定期試験前はもっぱら大学の図書館で勉強するようになった。当時は場所の取り合いだったが，今はどうなのであろうか。カフェで勉強をしている学生を見ると時代の流れを感じる。

大学4年生になり研究室に所属するようになると，先生と先輩との話の間に聞いたことのない専門用語が飛び交っていた。さっぱり言っていることがわからない。日本語なのか，英語なのかもわからない。とりあえず，近い言葉を図書館で調べることから始めた。ようやく概要が分かるようになると，次の理解すべき内容も捉えることができるようになった。学生時代，他大学で研究を行っていた私は，先輩から，論文の参考文献を全て集めてくるように指示され，A4の紙に50本以上の参考文献が書かれた紙を渡され，学部ごとにあった図書館の書庫をはしごした。今は古い論文でもインターネットで手に入れることができるが，当時は印刷するしかなかった。ただそれが意外と面白く，こんなに古い本もあるのか，こんな本もあるのかと文献を探しながら本を手にして，多様な世界が開けていく気がして楽しかった。それ以来，研究に行き詰まると図書館に行ってリフレッシュし，また研究を再開するという学生生活を過ごした。

研究者になった今は，毎日，インターネットで文献を探す。しかし，図書館で心穏やかにたくさんの本を読みながら過ごしたいとも想う。学生の皆さんも，心落ち着く時間として図書館を利用するのはいかがでしょうか。思いもよらない出会いや心躍る時があるかもしれませんよ。

● FACULTY PUBLICATIONS

本学部教員の刊行物紹介

日系インドネシア人のエスノグラフィ
紡がれる日系人意識

伊藤雅俊 著　［春風社］

本書は,残留日本兵をルーツとする日系インドネシア人とはどのような人々であるのかを解明するものである。日系人として抱く共通の歴史的記憶,家庭内における日本文化の影響,日系人組織とのかかわり方,日本での就労と日本滞在の影響など,日系インドネシア人の日系人意識の形成過程とそのあり方について多角的に考察し,これまで明らかにされてこなかった彼らの姿を描き出すことを目的としている。

本書は博士学位論文が基になっている。博士学位論文においてはエスニシティという概念を採用して日系インドネシア人の日系人意識を探ったが,同概念を用いた研究の深化はこれからの課題とし,本書では民族誌的記述に専念した。理論的な部分を削ぎ落し,日系インドネシア人の方々の語り・生き方を前景化させた。インドネシアでも日本でもあまり知られていない彼らの姿を描写したことに知的財産としての価値を感じている。彼らと一緒に笑ったり悲しんだり,ときには喧嘩もしたりした。「私は父親のことや日系人の気持ちを語ることはできる。でも書くのはちょっと……書くのは伊藤に任せたよ」と言ってくれた故人・日系二世男性の言葉とその表情を忘れない。筆者にとって日系インドネシア人の方々は単なる研究対象者ではない。

ルドルフ・オットー『聖なるもの』と世紀転換期ドイツ
信仰と近代学問の相克

藁科智恵 著　［晃洋書房］

19世紀,「学問」という観念が大きく変化し,キリスト教信仰の自明性が揺らぐ情況の中,「宗教」に関わる「学問」,つまり神学,宗教学はどのようにこの情況に対処したのか。ルドルフ・オットー『聖なるもの』(1917) は,神学者・宗教学者オットーによるこの情況への一つの対応である。本書はこの著作を繋留点として,当時の学的議論に内在しつつ,相互に緊張を孕んだ知的議論の布置連関,この知的議論を深く規定した当時の宗教的・精神的情況を解明的に叙述する。

第一部では,19世紀から20世紀にかけての世紀転換期ドイツの教会内外の宗教的情況を確認し,その情況に対する同時代人の分析を通じ,当時認識されていた「宗教の危機」を叙述する。

そのような宗教的・社会的情況の中で,「宗教」が学的にどのように議論されていたのか。第二部では,19世紀の自由主義神学,心理学における「宗教」の位置づけ,それへのオットーの批判と応答を扱う。

第三部では,上述の危機的な情況への一つの応答として『聖なるもの』を,「宗教的アプリオリ」という観点から神学者トレルチと,「現象と実在」から心理学者ジェイムズと,そして「絶対他者」から神学者カール・バルトと対比させる。そしてオットー『聖なるもの』が彼自身にとって,また当時の知的・精神史的情況にとって何を意味したのかを明らかにする。

犯罪学におけるコントロールモデルの展開と犯罪原因論の課題

上田光明 著　［日本評論社］

本書は,これまで筆者が一貫して取り組んできた研究の集大成として,自身の博士学位論文をベースにしつつ,大幅な加筆修正や新たな解釈を加えたものである。

序章では,犯罪学の歴史的な展開を概観し,その中でのコントロールモデルの位置づけを行った。第一部「理論編」においては,同モデル成立前の萌芽的研究からその展開を丹念に追うことで,同モデルの理念系を導出し,その主張に忠実な検証方法を提案した。第二部「実証編」においては,この検証方法に基づいた実証的評価を行った。具体的には、日本と韓国の中学校や日本の大学で実施した質問紙調査のデータを用いて精緻な統計分析を行った。第三部「評価・課題編」では,政策的な側面からの同モデルの評価,さらには,日本における少年犯罪の減少傾向の同モデルによる説明を試みるとともに,総合的な考察を行い,コントロールモデルと犯罪原因論の課題を明らかにした。補論では,コントロールモデル提唱者であるトラビス・ハーシ教授の追悼論集に筆者が寄稿した英語論文の日本語訳を掲載した。

年金だけに頼らない不動産によるライフプランの作成

筧正治 著　［創成社］

定年後の生活に不安を覚えている人が多くいる。厚生年金の平均受給額は1世帯当たりで月額220,724円 (2020年) しかない。他方,生命保険センターの「令和元年度,生活保障に関する調査」によればゆとりのある老後の生活には少なくとも月額で36.1万円程度が必要であるとされる。厚生年金受給者は年金の他に世帯で月額14万円程度のキャッシュフローを確保しなくてはならない。キャッシュフロー確保の方法の1つが不動産投資だ。不動産投資は数千万円,数億円必要なリスキーなマーケットだという側面もあるが,首都圏でも築20年を超える住宅なら数百万円で販売されているケースがある。中古物件を購入する不動産仲介業者の目的は賃貸ではなく転売であるため20年も過ぎたような住宅には目もくれない。他方,子供が騒いでも気兼ねしなくてよい,ガーデニングができる,好きな楽器が弾けるなどの需要を満たす賃貸住宅は転勤族を中心に需要に供給が追い付かない。そのような中古住宅を的確な場所に3軒ほど持ち運用すれば年金ほどの収入はすぐ得られる。本書は生きていくために,新たな生き甲斐づくりのためにライフプランに賃貸経営を取り入れようとする挑戦者のために贈る書籍である。

ボルネオ島における持続可能な社会の構築
自然資本を活かした里山保全奮闘記

鈴木和信 著　［明石書店］

本書はマレーシアサバ州のある村の里山保全の奮闘をまとめたものである。まず,私と村のひとびととの交流を記録し,知見や教訓を整理した (第1章)。次に, それらを少し専門的に解説した (第2章)。その上で,今の日本で生きていくために大事なこと,あるいは今のせわしい社会で忘れがちなものを整理した (第3章)。

日本国内の経済不況,世界的なコロナウイルスの蔓延など,なかなか希望を見出しにくい現代社会において,予定調和的に理論と実践の対話を描くような文書は時として牧歌的でリアリティーに欠けることがあるかもしれない。そこで生活者の視点に立って考え,社会にとって望ましい持続性,堅牢さ,しなやかさ等について深い問いを発信し,今後の社会の在り方や目指すべき方向の一つを提示したいと考えた。この小さな村の話は,これからの混沌として不透明で不確かな世界で如何に自己実現を図り幸せに生きていくべきかを教えてくれる。

私が知っている海外協力隊員が次のように言っていた。「聞いたことは忘れる,見たことは思い出す,体験したことは理解する,発見したことは身につく」。本書を通じて,何か一つでも小さな事でも,「そうだね〜」と共感し,新しい発見につながってくれたら幸いである。

所蔵資料紹介

Новое время (New times)

特任教授　安元隆子

「近くて遠いロシア」が最近,俄然,注目されている。そう,2月に勃発したロシアによるウクライナ侵攻である。10月末現在,まだ収束は見えない。連日ニュースで放映されるめちゃめちゃに破壊されたウクライナの街や村をみつめながら,21世紀になってこんな戦争が起こるなんて！と心を痛めている人々は多いだろう。このような事態を招いたロシアは日本にとって隣国。だとすれば,良きにつけ悪しきにつけ,大国・ロシアを知る必要は大いにある。しかし,欧米や中国への関心に押されて,残念ながらこれまで日本のロシアへの関心は低かったと言わざるを得ない。

そのロシアを知ることの重要性をわが国際関係学部図書館は以前から正しく認識していたようだ。和書庫4階には,1982年から2006年までの“Новое время”(『ノーボエ・ブレミヤ』,「新しい時」の意味)がある。この雑誌は1943年に「戦争と労働者階級」の名でモスクワで月2回刊行されていたが,45年7月より『ノーボエ・ブレミヤ(新しい時)』と名前を変え,47年1月以降,週刊となった。図書館の蔵書は残念ながら2006年までのものである(この後,出版社の経営者が変わったことも図書館の継続購入中断に関係しているのかもしれない)。ソビエト時代の内容は,ソ連の内外の状況,外交政策の問題,国際的なニュースを主な柱としている。新生ロシアになってからは,焦点,最新ニュース,ロシア,世界,社会,文化などに内容が細分化されている。本来は社会・政治雑誌だが,総合雑誌と言ってもよい内容である。2012年には68ページ,発行部数はおよそ5万部であったという。

さて,日本に関する記事を探してみると,例えば,1991年11月の44号には,「反日感情」の見出しの下,「日本がクリル諸島の島を奪おうとしている」という記事を載せている。そして,当時の宮澤喜一総理の写真と共に「東京はクリル諸島を買いに行くのではない」という日本側の視点を解説した記事,そして,当時のロシアの外務副大臣の「私は島の譲渡の提唱者ではない」というインタビュー記事が掲載されている。この半年ほど前の1991年4月には,当時の海部総理とゴルバチョフ大統領が日ソ共同声明に署名し,北方四島が平和条約において解決されるべき領土問題の対象であることが初めて確認された。しかし,当時のロシアはペレストロイカを経てソ連邦終焉に向かうまさに混乱の時期であった。彼らにとって,日本は人の弱みに付け込みロシアの国土を奪おうと近寄る不審者以外の何者でもなかったに違いない。これらの雑誌記事からは,このようなロシア側の認識を読み取ることができる。専門家がまとめた北方領土史やニュースでは伝わってこない,様々なロシア人の吐息が感じられるのである。一般市民の感情を知るためにも有効な資料と言えるだろう。

昨年(2021年),ノルウェー・ノーベル賞委員会は,「民主主義と報道の自由が一段と困難な状況に直面する世界にあって,理想のために立ち上がるすべてのジャーナリスト」に光を当て,フィリピンのマリア・テレッサ氏と共にロシアの独立系新聞『ノーバヤ・ガゼータ』の編集長,ドミトリー・ムラトフ氏にノーベル平和賞を授与した。この『ノーバヤ・ガゼータ』に所属していたジャーナリストの中には暗殺された者も多い。その一人がアンナ・ポリトコフスカヤである。彼女は反プーチンの主張を鮮明にしてロシア議会民主制の死を訴え,チェチェンへの数多くの取材を基に「テロとの戦い」を掲げたチェチェン戦争における偽善に満ちたロシア軍の真実の姿を暴いた。そのアンナは2006年10月7日,自宅アパートで何者かによって射殺された。真実がプロパガンダで塗り固められ,自由な報道が抑圧されるロシアを象徴するような出来事だった。

この事件に対する『ノーボエ・ブレミヤ』の反応を見てみると,約一週間後の2006年10月15日の41号には「最新ニュース」のコーナーで,「銃殺」と題して生前のアンナ・ポリトコフスカヤのチェチェン戦争取材の意義を記し,自由なジャーナリストたちのシンボルだったからこそアンナが射殺されたのだと指摘している。そして,プーチン体制下,果たしてこの事件の誠実な調査が十分に行われるのか,鋭い疑問を呈している。このように,本学部図書館が所蔵する『ノーボエ・ブレミヤ』は,銃撃や脅迫を受けながらも権力に屈せず反骨精神みなぎる報道を続けている『ノーバヤ・ガゼータ』とは異なるが,社会や政治を中心に,ロシア人の様々な関心を集約して掲載している総合雑誌であり,まさに時代の雰囲気を伝える貴重な資料の一つと言えるだろう。

そして,ロシア語で読むことが難しい人は,その表紙や写真,挿絵を見るだけでも当時の雰囲気が十分に伝わってきて,新鮮な驚きを感じるのではないかと思う。昨今,図書資料のデジタル化が進んでいて,それはそれで便利な一面もあるが,少し黄ばんでザラザラとした手触りの,あまり質の良くない紙面をめくっていると,つやつやのカラーページが多用されている日本の雑誌とは異なり,それだけで当時のソ連,そしてロシアが伝わってくる。ぜひ,一度手に取ってみていただきたい。

▲Новое время　2006年10月15日号

教員による推薦図書紹介

●RECOMMENDED BOOKS

失敗の本質　日本軍の組織的研究

戸部良一 ,寺本義也,鎌田伸一,杉之尾孝生,村井友秀,野中郁次郎　[中央公論新社 中公文庫]

国際総合政策学科 助教　**笠原 孝太**

「なぜ歴史を学ぶのか」と問われたら,人は何と答えるだろうか。

出来事の経緯や前後関係を知りたい,ある特定の人物や出来事に興味がある,純粋に知的好奇心を満たしたい,など人それぞれ答えは違うだろう。

いずれも歴史を学ぶのに十分な理由であるが,もしあなたが「歴史から教訓を得たい」と考えているのであれば,本書を推薦する。

重要な教訓は失敗の中にこそあるもので,本書では「日本の敗戦」を取り上げている。これほど巨大な失敗は,近現代の日本史を見渡しても他にないだろう。

本書の最大の特徴は,いわゆる「戦史研究」ではなく,日本軍という組織に注目した「組織論的研究」を行っている点である。

本書では失敗の具体例として,ノモンハン事件,ミッドウェー,ガダルカナル,インパール,レイテ,沖縄戦の6つの作戦を取り上げて検証している。個々の作戦だけをみると軍種も兵力も対戦国も異なるが,これら6つの作戦には,日本軍という近代組織が,組織的に作戦を策定し,組織的にそれを実施し,組織的に失敗したという共通点がある。

ここから,本書は日本軍を“連鎖的失敗を犯した巨大組織”として,組織論的研究を展開している。

日本軍の組織的失敗の本質として,「あいまいな戦略目的」「空気の支配」「人的ネットワーク偏重の組織構造」「属人的な組織の統合」「学習の軽視」などの項目をあげ,それぞれ具体的な事例から理論的に分析を行っている。そして,最終章の「失敗の教訓」では,日本軍の失敗から組織論的教訓が導き出されている。

はたして,旧日本軍の組織的失敗とその教訓は,現在の日本社会で生かされているのだろうか。読了後,自らの目で確かめてほしい。

スタンフォード式 疲れない体

山田知生 著　[サンマーク出版]

国際総合政策学科 助教　**加藤秀治**

全く疲れることがなく毎日を精力的に生きている人は,どのくらいいるだろうか。むしろ,「最近,いくら寝ても寝た気がしないな…」「以前より疲れやすくなったな…」という状態を感じている人が多いのではないだろうか。

最近ではコロナ禍により,疲労が免疫力を低下させ,感染症にかかりやすくなることが知られるようになった。しかし,軽度の疲労状態では無理をすればそのまま活動することが可能なため,日常生活においては疲労を軽視しがちである。とはいえ疲労は放ったままにしておくと徐々に体に蓄積されていき,蓄積された疲労は病気や怪我の原因になりかねない。そのため,健康の維持においては「疲れにくく、疲れてもすぐに回復する体」を作ることが重要である。本書はその方法を日常生活に活かせるように紹介している一冊である。

著者の山田知生氏は,スタンフォード大学にてスポーツ医局のアソシエイトディレクター兼アスレチックトレーナーを担当している。

本書は,著者が日々のアスリートとの実践を通して得た情報や,スタンフォード大学で蓄積された世界トップレベルの科学的知見を用いて,疲労発生のメカニズムや疲労した状態から即座に回復する方法等を紹介している。具体的には,著者がこの本の一番のトピックスとして挙げている「ＩＡＰ呼吸法」を中心に,入浴,睡眠,食事,日常動作,マインドセット等の項目に分けてわかりやすく説明されている。まずは興味のある項目から読んでみるのもいいかもしれない。

日々の体調を整えることは,現代社会において大切な能力の一つとして認識されている。その能力を修得するにあたり,科学的知見を基にした確かな情報を得ながら,自身の健康について考えるにはお薦めの一冊といえる。

他者の靴を履く　アナーキック・エンパシーのすすめ

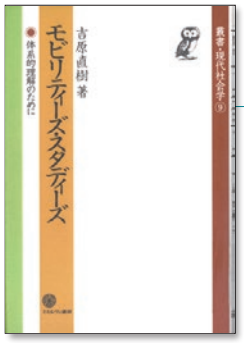
ブレイディみかこ 著　[文藝春秋]

国際教養学科 教授　**松本 佐保**

この本の著者,ブレイディみかこさんは,イギリス在住の保育士で,ノンフィクション作家である。イギリス人と結婚し息子さんがいて,本書では日々の仕事や生活を通じてこの国と日本との違い,そこから学ぶこと,また社会の矛盾にも鋭く切り込んでいる。アメリカがイギリスの植民地から246年前に建国されたのに対し,イギリスは日本と同様2,000年以上の長い歴史を持ち,保守的とされるが,過去の植民地からの移民,インド系やアフリカ系が多く在住し社会的にも成功している者も少なくない多文化社会である。

彼女は,イギリスは素晴らしい多文化共生の国で,日本が学べるものが沢山あるということだけではなく,この国の階級問題や人種問題に鋭い批判的な目を向けている。以前の著作『子供たちの階級闘争～ブロークン・ブリテンの無料託児所から』(みすず書房) では,イギリスでは学費の高い一流学校か,貧困層が行く三流学校かで,階級が決まるなど社会の弊害が赤裸々に描かれる。では貧困家庭に生まれた移民には社会上昇の道がないのかというと,そうではない。福祉国家なので,貧困家庭でも成績優秀者には奨学金制度などが整備されている。また人種問題では『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』(新潮社) で,息子さんが学校でイエロー(半分黄色人種)であることからの人種差別にあいながらも,逞しく成長していく様子を描く。そして『他者の靴を履く,アナーキック・エンパシーのすすめ』では,シンパシー (同情) ではなく,エンパシー (共感) が強調される。自分と全く異なる育ちや考え方をする他人になってみる,想像する,じっくり色々考えてみる。そうすると不思議とエンパシーが生まれる。そこから自分自身の生き方のヒントも見つかる。インターネットで探しても見つからない,生き方のヒントは,エンパシーが導き出してくれる。

この著作は,他人事になりがちな異文化理解を,自分事として考える好機を読者に与えてくれる。



モビリティーズ・スタディーズ　体系的理解のために

吉原直樹 著　［ミネルヴァ書房］

国際教養学科 准教授　宮城博文

本書では，これまでの社会学での「移動」の捉え方，「移動」を通じた場所の考え方が考察されています。特に，昨今のグローバル化やコロナ禍といった外部環境の変化の中で，これまでの国境・地縁等で定められていた「場所」という社会の在り方が変化し，近年の移動の拡大により，社会が移動に対し肯定的に変化する可能性を指摘しています。

本書の興味深い点は，事例を用いて，移動による場所やアイデンティティの在り方の変化が描かれていることです。例えば，移民は，移民先で自らの存在が不確かなため，当該国・地域で「〇〇県人会／村人会」を結成し，自らの存在を自認していきますが，時が経ち，日本のことをよく知らない三・四世が増えていく中で，県人会等の「〇〇まつり」で日本のことを理解するようになっていきます。他方で，場所・アイデンティの再定義，移動の拡大は，簡単に移動できる人とできない人の格差を招いたり，他者への排他的な動きに拍車をかけたり，といった負の側面も浮き彫りにしています。例えば，移動が多いアメリカのような国においても，近年のアメリカ前大統領のドナルド・トランプによる「アメリカ・ファースト」のような多文化共生が反転した動きも表出しています。

本書の議論を地域振興に当てはめてみると，場所やアイデンティティの境界を再定義するといいながら，結局は，インテリ，都市型，ノマド視点となるといった，非常に穿った見方をすることができます。他方で，地域外の人々とインターネットで瞬時に繋がる社会の中で，当該地域に関心を持ってやってくる、心も頭も熱い「よそ者」を地域住民がどのように見極めていくのかということも考えさせられます。本書は，様々な先行研究のレビューがあるため（ラトゥール，ジンメル，アーリ，他），若干「小難しい」本ですが，「移動」「地域振興」を再定義できる良本だと思います。ぜひ手に取って読んでみてください。

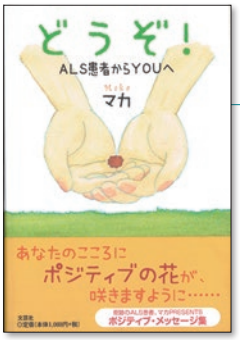
ボルドリッジ エグゼクティブ・マナーズ

レティシア・ボルドリッジ 著／新井祐子 訳　［ダイヤモンド社］

ビジネス教養学科 教授　永田美江子

作者のレティシア・ボルドリッジはケネディ大統領の在任中にホワイトハウスの儀典責任者を務め，「アメリカ人のマナーの家元」的存在と言われています。本書はそのマナーの世界的権威が書いた，国際ビジネスを展開するエグゼクティブが心得ておくべき日常の交際，会話，服装，手紙，行動などの国際マナーの基本書です。ビジネスの世界では，良いマナーは経済効率が高いという作者の信条のもとに①エグゼクティブの行動について，②女性エグゼクティブとの接し方，③エグゼクティブの基本戦略，④ビジネスレターの実際，⑤エグゼクティブの服装学，⑥外国でのビジネスマナー，⑦女性社員の基本的マナー，⑧ノンプロフィット団体への責任，⑨エグゼクティブが退職する場合と9つの章にわかれています。

アメリカでも社会常識ともいえるビジネスマナーを学んでいるという背景には，アメリカ社会の問題が浮き彫りになる中で，アメリカ人が人間関係の築き方に自信を失い，職場での人材育成に悩み，企業イメージの向上を望み，倫理観の喪失を何とかしなければいけないと気付いたという事情があると書かれています。今から30年ほど前の古い本なので中身も古いのではないかと思いがちですが，現代の日本のビジネスシーンでも応用できる内容です。裏を返せば，それだけ日本が遅れているのかともとらえられますが，重要なことは今も昔も変わらないのではないかと考えさせられます。社会人になったらエグゼクティブを目指す人にも，そうではない人にも読んでいただきたい1冊です。



どうぞ！　ALS 患者から YOU へ

マカ 著　［文芸社］

食物栄養学科 助教　小山ゆう

「奇跡のALS患者，マカPRESENTS ポジティブ・メッセージ集」あなたのこころにポジティブの花が，咲きますように・・・・・・と書かれた帯が付いているこの本は，私自身がALS患者の遺族でなければ，気に留めなかったかもしれません。ALSとは筋萎縮性側索硬化症という難病のことで，この本のカバーには，「神経系が壊れ，体が動かなくなる病気です。未だ有効な治療法がなく進行の予測もつかない，死に至ることもある難病です。」と書かれています。故三浦春馬さんが主人公を演じた「僕のいた時間」というドラマで取り上げられて，認知度は少し上がったかもしれませんが，まだどのような病気かを知る人は少ないと思います。私は家族2人をこの病で亡くしており，闘病生活の壮絶さを理解できているつもりです。それがゆえに，この本に書かれているポジティブなメッセージをこの病気の患者が書いたと知って大変に驚きました。また，大いに励まされました。

「人生はロシアンルーレット！理不尽に感じてもいい」という言葉から始まり，「気づいた時が，学んだ瞬間！」「自分が辛いことは，相手もきっと辛い」「できない数よりできる数を数えていこう！！」などの言葉の下に，簡単に読める解説文章がついていて，文字数も少なく大変読みやすい本です。どれも聞いたことがあるような文言に感じるかもしれませんが，あの過酷な病と闘っている人から出た言葉と思うと，目が覚める思いがしました。大学という専門分野で難解な勉強している学生さん，日々人間関係など様々な問題に直面して悩んでいる学生さんにとって，簡単に読むことのできるこの本が少しでも救いになればと思い，この本をお勧めします。

図書館事務課から ● LIBRARY OFFICE

図書館では，利用する方のために新刊書を提供するとともに，さまざまなサービスの充実に努めています。
今回は，今年度あらたに取り入れた，読書生活をサポートするツールについてご紹介します。

❶ 電子図書館サービス「LibrariE」（ライブラリエ）

これまで，「KinoDen」（キノデン）を中心に学術系の電子書籍を取り揃えてきましたが，もっと気軽に電子書籍を利用してもらえるよう，4月から電子図書館サービス「LibrariE」（ライブラリエ）を開始しました。

小説や旅行ガイドブック，料理本，実用書など気軽に読める一般和書140冊を取り揃えています。利用できる方は，本学部および短期大学部（三島校舎）の学生及び教職員で，一人3冊まで2週間貸出を受けられます。

利用手続は，初めての方でも簡単にできます。まずは，図書館ホームページの電子書籍のタブから電子図書館サービス「LibrariE」のサイトにアクセスしてください。ログイン方法がわからない方のために使い方ガイドも掲載しています。貸出は，１回に限り延長でき，貸出期限が終了すると自動的に返却されます。また，貸出中の資料は，予約をすることもできます。

「LibrariE」の蔵書は随時入れ替えていきます。興味のある本などがありましたら，図書館カウンターまで申し出てください。

❷ BOOKデータASPサービス

図書をOPAC（Online Public Access Catalog）で探す際に役立つ機能「BOOKデータASPサービス」を取り入れました。これは，OPAC画面上において資料の表紙や目次を確認できるサービスで，次の3つの機能があります。

①表紙画像の表示

OPAC画面上で，著作権処理の済んでいる表紙の画像（書影）を見ることができます。2000年以降に日本国内で出版された図書のうち，８割以上の本が対象となっています。

②目次・要旨の表示

検索した資料の目次と要旨を確認することができます。1986年以降に出版されたISBNのある図書が対象です。

③著者の略歴の表示

奥付やカバー等に掲載されている著者紹介を確認することができます。2001年以降に出版された図書が対象です。

これらの機能は，所蔵する本すべてに対応しているわけではありませんが，事前に画面でその内容を把握することができ，本を探す際には役立ちます。

❸ 国立国会図書館「図書館向けデジタル化資料送信サービス」

5月から国立国会図書館「図書館向けデジタル化資料送信サービス」を導入しました。このサービスは，国立国会図書館がデジタル化した資料のうち，絶版等の理由で入手が困難な資料約150万点を図書館内で利用できるものです。国立国会図書館に出向くことなく，画面上で資料を検索し閲覧できます。

利用できる方は，本学部および短期大学部（三島校舎）の学生及び教職員で，利用する際は図書館カウンターで申し込み，専用の端末で閲覧します。資料の複写（有料）サービスも行っております。

なお，国立国会図書館では，5月19日から「個人向けデジタル化資料送信サービス」が開始となりました。こちらのサービスは，現在，閲覧利用のみとなっています。

今年度導入したツールを紹介してきましたが，大学ではこれからも利用しやすい図書館を目指して，サービスの充実に取り組んでまいります。

図書館ニュース
BIBLIOTHECA
第18号
通巻第163号
発　行　日／2022年11月1日
編集・発行／日本大学国際関係学部
図書委員会
https://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/